

非漢字系学習者に対する 中・上級の語彙指導

田丸 淑子
国際大学
日本語プログラム

要 旨

非漢字系学習者に対する中・上級の日本語学習では比較的短期間に語彙を増やすことが重要である。従来これは、主としてテキストの読解を通して行なわれるのがふつうであって、授業時間数の少ない場合では必ずしも効果的とはいえない。そこで逆方向、つまり、はじめにごく短いテキストで語彙、特に漢字語彙を集中して学ばせ、それから長文読解、聴解のスキルへと進めることを試みた。結果はプラス、マイナス両面あり、練習期間、後に何を続けるかなどが課題として残った。しかし、進歩を学習者自身が評価できる点や、未知語彙を減らすことによって、比較的早い時期から新聞記事やニュースに対して心理的な圧迫感が減じた点は評価できる。学習者の背景や目的、学習条件等が多様化している現在、語彙指導は、多様な学習状況に合わせて初級段階から再検討が迫られている。語彙教育の工夫、語彙習得の研究等が必要となっている。

1 はじめに

この二年間、非漢字系学習者の中級後期・上級の授業を担当し、読解および聴解でいくつかの方法を試みた。その結果、読解であっても聴解であっても、このレベルでの日本語学習の成否を左右する重要な鍵のひとつは、いかにして比較的短期間に語彙、特に漢字語彙を増やすかにあると気付いた。

中・上級の学習が初級の学習と大きく違う点のひとつは、学習すべき語彙数の圧倒的な拡大である。ひとつの例として、日本語能力試験の出題基準を考えてみると、4級800語、3級で1500語であったのが、2級で6000語、1級で1万語と、3級と2級の間、2級と1級の間に急上昇する¹⁾。また、ACTFLのOPI (Oral Proficiency Interview) の評価基準でも、中級の中以上ではカバーすべき話題がそれまでの日常生活や身の回りのことからぐんと広がると同時に抽象度も深まるということは、それを支える語彙力が要求されているということである²⁾。

それでは、これだけの語彙数の急激な拡大をどのように指導したらよいのか。現場の教師はそれなりの苦勞をしているのだろうが、それが共通の語彙指導の問題として真剣に取り上げられてきたとは思えない。この段階は初級段階とは異なり基本文型は既に習得され、語彙・表現の習得に時間と力が注げるはずだと、比較的軽く考えられてはいないだろうか。

また、従来、上級レベルまで進む学習者には圧倒的に漢字系学習者が多く、彼らにとっては、漢字語彙が増えれば増えるほど語彙レベルの理解は楽になるので、語彙は学習者に任せておけばよいと考えられるのであろうか。

最近では上級まで進む非漢字系学習者が増加している。しかも従来のような「じっくり時間をかけて四技能をバランスよく積み上げる」余裕のない場合が増えている。このような学習者に対しては、中・上級でどのような語彙指導をしたらよいのだろうか。本稿では、筆者が担当した授業での問題点と改善の試みを報告し、それに基づいて、語彙指導を見なおすいくつかの提案をしたいと思う。

2 問題

- 1) 93/4年度に筆者が担当した学生は、
 - ①中級後期の非漢字系の大学院学生。
 - ②専攻は国際関係学と国際経営学(MBA)。日本語授業以外は共通語として英語を使用する。
 - ③授業時間数は、週90分x2コマ。一学期は10週でこれを3学期。
 - ④目標は(辞書をひきながら)新聞の経済・政治・外交関連の記事が読めるようになる、ラジオニュースが理解できるようになること。これに対応するような書きのスキルは目標としない。
 - ⑤授業は、一学期目に教科書(「長沼 新現代日本語IV」)を用いたいわゆる読解を行なった。二・三学期目は、読解(教科書および新聞記事)と聴解(ラジオのニュースの聞き・書き取り)とを1コマずつ行なった。

- 2) 上記の授業の結果見えてきたことは、このような環境での日本語教育では、
 - ①語彙力の不足が学習の種々の側面で日本語力向上の足かせとなっている。
 - a 読解でも聴解でも、含まれる未知語がある程度以上になると、類推が難しくなり、学習者が調べなければならない語彙数がより増え、準備に非常に時間がかかる。これは学習者の取り組む意欲を著しく低下させる。
 - b 語彙の不足は、理解の面の問題だけでなく、表現面でも学習意欲を削ぐ。(言いたいことが言えない、聞いていて表現が稚拙)
 - ②従って、「新聞を読む」「ニュースを聞く」という目標を立てた場合、効果的な学習が行なわれるためには、学習者の語彙、特に漢字語彙を短期間に増やす工夫が必要となる。
 - ③比較的短期間に語彙を増やすという目的のためには、一週間の授業時間が少ない場合、「上級教科書の伝統的な長文読解」式の授業はあまり効果的方法とは言えない。ここで「伝統的な長文読解」とは、「語彙理解、表現の説明と練習、内容理解、内容に関する会話または討論等」を含む一連の教室作業のことを言う。その理由は、
 - a 上記のような読解授業はいろいろな作業やスキルが混在しており、授業の焦点

がしぼりにくく、達成目標も明示しにくい。

b 従って、学習者にとって自分のある特定の知識やスキルが上達しているのかどうか、自己評価しにくい。

c 語彙という面から見た場合、ひとつのテキストが長くなると、新出語彙の数が増え、その領域も分散するので、一課の中でまとめにくい。また逆に、限られた授業時間数で長文テキストの読解を行なうと、扱えるテキストの数が減るので、一学期でカバーする語彙の分野が偏る。

d 教科書に取り上げられたテキストは内容的におもしろ味のあるものが少なく、準備に時間をかけてでも読んでみようという気を学習者におこさせない。しかし、学習者が興味を持ちそうな生素材、特に時事的な話題のものだけを選んでいては、どうしても断片的になり、系統だったプランが作りにくい。

⑤当然のことだが、読解でも、聞き取り・書き取りでも、語彙知識の拡大が日本語能力の向上に結びつくには、文法力の裏付けが必要である。

3) 筆者の直面した上記の問題点は、中・上級の学習における語彙の問題を扱った先行論文にも関連する報告が見られる。主なものをいくつかあげてみる。

①岡野はアメリカで初級段階を学習した学習者が中級で遭遇する問題点とその対策を報告しているが(岡野 1992)、その中で以下のような指摘をしている。

a 最近の学生は実際の漢字力は別として、早く新聞・雑誌レベルのものを読めるようになりたいという希望をもっている。

b 国内・国外を問わず、初級教育では学生は一般的にインプットの少ない学習をしてきている。

c 漢字・語彙は、初級学習と中級学習の間には、まず量的に圧倒的な差がある。この上に、書き言葉、漢字熟語などの質的な差がこれに加わる。

d 従って、十分かつ適切な語彙・漢字熟語の知識がなければ中級段階での学習の向上は望めない。

これらの指摘は、どれも筆者の経験と合致するものである。

②読みテキスト中に未知語(または一般に使用される頻度の低い語彙)が出現する割合と読みの難しさの程度の関係については、英語教育でいわゆる Readability の問題のひとつの要因として種々の実験と論議がされてきた(Nation & Coady 1988)。

授業での読解の場合は辞書をひいたりして語彙の意味を調べるので、直接 Readability の問題とは言えないが、未知語の割合がある線以上になった場合には、文脈からの意味の類推に支障をきたすことや、準備に費やす時間の増加など、教育的効果からは考慮の必要がある。

類推能力を高めることの重要性が最近特に言われているが、この点で、語彙ではなく漢字をあつかったものではあるが、経済学文献に現われる漢字のカバー率

(どれだけの漢字で全使用漢字の何パーセントをカバーしているか)を視覚化した志柿の報告は興味深い(志柿 1992)。未習漢字部分を黒で塗りつぶしたこの視覚化例を見ると、カバー率90%の漢字使用(上位435字)のテキストは類推

進め方

①上記の方針に沿い、教科書として「外国人ための新聞の見方・読み方」(KIT教材開発グループ)を選んだ。主な理由は、政治、外交、経済など分野別になっていること。テキストが新聞記事のスタイルであること。テキストのひとつの単位が二、三文から長いものでも一段落程度であること。内容に重複があり、同じ語彙が何度も出てくること。英語訳の語彙表があること。

②実際の授業では、

- a その日の予定分の語彙と文の意味を学生が予習してくる。
- b その日の予定分の中の語彙についてクイズを行なう。
- c 内容の理解より語の使い方に焦点をあてる。文の言い換え、出てきた語を組み合わせでの口頭作文、連語の確認等をおこなう。
- d 勉強している内容にあわせ、学習した語彙を含む生のラジオ・ニュース(30秒程)を聴かせたり、同様の新聞記事数行を読ませる。
- e 週三時間のうち、二時間は進み、三時間目はもどって、まとめの練習および表現の練習にあてる。

2) この試みの結果は、

①プラス面

- a 焦点をしぼったことで、学生は今何をやっていて、自分の力が伸びているのかわか判断することができた。(長文読解などでは、これがなかなかつかめない)
- b 同じ語彙が教科書、新聞、ラジオニュースと何度も繰り返されることは、定着につながる。また、語彙が増えていくのが実感できる。
- c ニュースや新聞記事を同時に提示したことで、学生は「生のものが理解できるようになった」という実感を持ち、学んでいることが役に立つという動機の強化につながる。
- d 学習した分野については、漢字語彙は増えている。それによって、次の学期にやや長めの新聞記事を読むことに抵抗をあまり感じないようである。ただし、これは直ちに、正確に読みこなせることにつながる訳ではない。
- e 漢字語彙が増えたことで、表現する際に、話題に合った語彙が使えるようになり文法的な問題は多々あるが、大学院生らしく聞こえるようになった。

②マイナス面

- a 語彙を強調した当然の結果だが、文法に対する注意が十分でなかった。
- b 素材に用いた文章が構文がやさしく語彙さえ分かれば理解できるようなものが多かったため、学生が、語彙が増えたこと=読解力、聴解力がついたことという錯覚に陥る危険性がある。文法の理解に基づかずに、単に語を拾って解釈しているだけのことがある。これは、漢字系学習者が中級読解で陥ると同様な問題である。
- c 英訳に依存する部分が大いことは否めない。しかし、短いとはいえ、文脈の

によって理解が十分に可能だが、80% (283字) ではかなり難しく、70% (198字) では殆ど不可能であることが、一見してわかる。未知語が多すぎる読解テキストの場合も同様なことが言えるだろう。

- ③中級教科書の語彙・文型の調査結果にもとづき、川口は、初級と異なり、教科書のみで中級レベルの学習項目とすべき語彙・文型をカバーすることは不可能だと指摘している (川口 1986)。これは、中級教科書では本文の話題や引用される文献に偏りが生じるため、この不足を補うために、川口は例文集、会話表現、特定語彙一覧等の補足教材が必要だとしている。ここで川口が調査対象としている教科書は、Integrated Spoken Japanese 以外は読解用の長文テキストを中心とした伝統的な中級教材である。

日本語を集中的に学習する学生には川口の提案が理想的であるが、週あたりの授業時間数が少ない場合は、教科書の一課を終えるのさえ何週間もかかる。さらに補足教材までというのは難しい上に、やったとしても、カバーするトピックが極端に限られてしまう。そうなると、長文テキストという教材 (=教科書) の形式を考え直してみる必要もあるのではないか。

3 試みと反省

- 1) 前年度の結果をふまえ、94/5年度では、語彙を増やしてから読解スキルに入るという逆方向からのアプローチを試みることにした。最終到達目標は前年度と同じで、学生もほぼ同様であるが、授業時間数は教室授業が週3コマ、それに一人週一回30分の話し方の指導を増やした。コースの内容と進め方は以下の通り。

基本方針

- ①はじめから読解、聴解といったスキルのコースにしない。代わりに、一学期は語彙習得を目標として前面に押し出す。つまり、読解・聴解スキルの練習と語彙習得とを切り離す。そして、ある程度の語彙力がついてから (二・三学期目) 長さのある生のテキストの読解・聴解に挑戦する。
- ②長文読解や聴解のテキストをはじめから語彙習得のための素材とすることをやめる。むしろ、学生が学ぶ必要のある分野 (政治、国際関係、政治、ビジネス・金融) の語彙にあわせてテキストを選ぶ。さらに、
- a テキストは長文でなく短いもので、限られた時間でできるだけ多くのトピックをカバーするようにする。
 - b 語彙が何度も繰り返し目にふれるようにする。
 - c 語だけでなく、連語 (修飾関係、名詞+動詞) を強調し、文末予測を意識させる。
 - d 教科書だけでなく、学習した語彙を含む新聞記事、ラジオニュースも併せて用いる。
 - e 語彙が増えることが理解につながることを学習者に実感させる。

中で提示されるので、意味・使い方で問題のありそうな語は注意することはできる。

d ひとつの文章単位は短く、読んでおもしろい内容ではない。かなり機械的、強制的な作業になりがちなので、学生の知的興味、自主性を満足させることが難しい。また、興味のない分野の場合にはやる気が起こらないという例も見られた。

③課題

a ごく短いテキストだが新出語彙の占める割合が高いので、学生の負担量が限度を超えないようにコントロールしなければならないが、できるだけ進度のスピードを落とさないようにすることも肝要で、そのかねあいが難しい。

b ここで報告した語彙練習の部分は、教師が目的と限界を明確に認識して、学生にも説明納得させておく必要がある。例えば、これをつづけても読解スキルの向上にはむすびつかないこと。

c さらに、これをいつまで続けるか。この方法で不足しているものをいつ、どう補うか、このあとに何を続けるか、長期的な計画が必要である。例えば、文法的な側面はどのような形で補うか等である。

4 語彙指導の再検討

以上の授業を担当して、学習者がこの段階で直面している問題を少しでも軽減するために、前段階で何をしておいたらよいのだろうと、考えずにはいられない。初級学習の目標を考える時、それは独立した到達目標を持つと同時に、多くの学習者にとっては上級への準備段階であるはずである。従って、語彙の面についても、効果的な中・上級学習のためには、前段階の初級からの連続で考えなければならない。そうすると、今まで文法指導や漢字指導の陰にかくれて、あまり意識されることのなかった初級の語彙指導を見なおす必要が出てくる。

1) 再検討を要する点

①語彙の重要性は認識されているか。

Carter 他が述べている通り、歴史的にその時々主流を占めていた外国語教育理論が何を重視するかによって語彙教育に対する認識も変化してきている (Carter 他 1988)。しかし日本語教育では、意味を重視するコミュニカティブ・アプローチが話題になる時代になっても、「外国語学習は、語彙リストの学習ではない。構造の習得が優先する」といったオーディオ・リンガルの姿勢が根強い。文型を重視するのは間違っていないと思うが、そのあまり、語彙に対する配慮が二次的になってはいないだろうか。

「文法がなければ伝達できることは非常に限られてしまう。しかし、語彙がなければなにも伝達できない。」と Wilkins は指摘する (Wilkins 1972)。語彙の意味類推が比較的容易な漢字系学習者についてはともかく、母語からの類推が全くできない非漢字系の学習者に対しては、初級段階で語彙はもっと重視されなければ

ならないのではないか。

②語彙選択の基準と数はこれでよいのか。

岡野は初級レベルでのインプットの少なさが中級に進んだ学習者の問題の原因のひとつと指摘している(岡野 1992)、これを語彙の領域で改善するためには、

a いわゆる基礎語彙の内容の再検討

初級語彙と中級語彙の違いについては、森田(1985, 1986)、玉村(1985)他が扱っているが、最近の傾向をみると初級は日常生活に密着した話し言葉的な語彙が基礎語彙として選択され、中級になってから書き言葉的な漢字語彙が出てくるとというのが一般的である。しかし、野村他(野村他 1993)も指摘しているように、大学生学習者等の場合は、ニーズを考慮して、書き言葉につなげることを意識した基礎語彙の選定が必要ではないだろうか³⁾。

b 語彙数

教科書で提示するものすべてを定着させようとする姿勢が、学習者の処理能力を考慮する結果、初級でのインプットを少なくしてしまっている。提示したもののすべてを同一扱いせず、学習者の必要に応じて優先順位をつけて指導すれば、インプットを増やすことは可能であろう。語彙も、盛り込む語彙数を増やせばよいのかという単純なことではなく、水準を設けて、段階付けをして提示するなどの工夫をすることができるのではなかろうか。

③語彙指導の方法はこれでよいのか。

浅野(1992)に見られるような、時間をかけ四技能をバランスよく伸ばすという枠組みの中の語彙指導が、日本語教育の伝統的姿勢であった。これはこれでよい。しかし再三述べてきたように、この枠組みにおさまらない学習者がふえてきている。そこでより柔軟な考え方が要求される。授業で使用するのを既習語のみに制限したり、媒介語の使用制限、読解・聴解とのセットでの語彙指導などの伝統的テクニックは再検討の余地がある。目的が明確でその方法の限界を認識していれば、より効率的な指導法の可能性はいろいろあると考える。

2) 研究成果からの情報

語彙に関連した分析研究の研究の成果は、語彙指導にすぐに結びつくところまでは進んでいない。しかし、まだ断片的ではあるが、指導法を再検討する際のヒントとなるものも出てきている。

- ①山本(1992)が行なった聴解における下位知識の分析のような研究が、漢字系・非漢字系や習得段階の異なる学習者に対して行なわれることが望まれる。また、同様の研究が読解についても望まれる。
- ②言語習得の分野では、英語教育で最近行なわれている incidental learning の研究は、読解にあたって語彙リストとし独立させて与えることの効果について検証しようというもので、興味ある結果が期待できそうである(Hulstijn 1992)。また、谷口他(1994)の語彙ネットワーク形成課程の分析結果は関連語などの形で語彙を増やす指導の際の提示の仕方について参考にできるかもしれない。

5 おわりに

ここ数年、学習者の目的、背景、学習環境の変化が著しい。その中で学習の成果に対する学習者の期待はより高くなり、教師は厳しい要求を満たさなければならなくなってきた。このような状況では、従来の方法にこだわらずに、新たな試みに取り組む姿勢と、その結果（特に問題点）に関する情報交換をさかんにする必要が痛感される。

註

- 1 国際交流基金・財団法人日本国際教育協会編『日本語能力試験 出題基準』1994年版による。
- 2 The ACTFL Oral Proficiency Interview Testr Training Manual, 1989年版による。
- 3 1963年初版発行の Modern Japanese for University Students Part I (国際基督教大学) は、典型的なオーディオ・リンガルアプローチの初級教科書であるが、対象を大学生と明確にしており、初級としては抽象的な漢字語彙の多い教科書である。それに対し、最近のコミュニカティブ・アプローチをうたった教科書には、大学生を対象としていても生活密着の話題・語彙を主としているものが見られる。

参考文献

- 浅野百合子 (1992) 「語彙の指導」 『講座 日本語と日本語教育13』 明治書院 pp.181-200.
- Carter, R and McCarthy, M (1988) "Developments in the teaching of vocabulary: 1945 to the present day" In Carter and McCarthy (Eds.) Vocabulary and Language Teaching, Longman, pp.39-59.
- Hulstijn, J (1992) "Retention of inferred and given word meanings: Experiments in incidental vocabulary learning" In Arnaud and Bejoint (Eds.), Vocabulary and applied linguistics, Macmillan, pp.113-125.
- 川口義一 (1986) 「中級教科書の語彙・文型」 『講座 日本語教育』 第2 2分冊 pp.14-27.
- 窪田富男 (1976) 「日本語教育における問題点 語彙力について」 『講座 日本語教育』 第1 2分冊 pp.15-31.
- 森田良行 (1985) 「語彙・文法教育 -中級段階を中心に-」 『講座 日本語教育』 第2 1分冊 pp.125-137.
- 森田良行 (1986) 「初-中級移行過程における語彙教育」 『講座 日本語教育』 第2 2分冊 pp.98-108.
- Nation, P and Coady, J (1988) "Vocabulary and reading" in Carter et. al. (Eds.) Vocabulary and language teaching, Longman, pp.97-110.
- 野村雅昭他 (1993) 「日本語教育のための漢字・漢語データベース」 『講座 日本語教育』 第2 8分冊 pp.142-156.
- 岡野喜美子 (1992) 「非漢字系学生のための中級漢字・語彙教育 -多メディア・多技能的アプローチ-」 『講座 日本語教育』 第2 7分冊 pp.1-17.
- 志柿光浩 (1992) 「経済学専攻の非漢字系学習者にはどんな漢字を教えればよいか -経済学文献を対象とした漢字使用頻度調査の結果と分析-」 『日本語教育』 7 6号 pp.67-87.
- 玉村文郎 (1985) 『語彙の研究と教育(下)』 国立国語研究所
- 谷口すみ子他 (1994) 「日本語学習者の語彙習得 -語彙のネットワークの形成課程-」 『日本語教育』 8 4号 pp.78-91.
- 山本富美子 (1994) 「上級聴解力を支える下位知識の分析-その階層化構造について-」 『日本語教育』 8 2号 pp.34-46.
- Wilkins, D A (1972) Linguistics and language teaching, Edward Arnold.